

積翠漫草  
完

服部文庫  
イ 17  
2306



尚書注疏

一本

117  
2306

特

高州府志

卷一

積翠漫州



此危き子之慢也や原或二三策或の  
 七策又た一小冊子女記三策記字記太又  
 在何事且得廳より得る可記而備忘  
 七六昔深き語を凡怪事而記せや是  
 也親時又之一般余位之孫求て女  
 印帳秘る信覽便不中か之之危き家  
 姓柳系名太亮字子守也  
 視仲美君之門人傳号積聖子傳年  
 得大位之時より取つて之を傳也  
 余

女固より古よりあるも古の人の書との  
 ぬるよりよりのものありて其の事  
 みきりありて其の事ありて其の事  
 火を止しきる事ありて其の事  
 三書より傳ののみ人の傳の  
 諸の事古律のみの時年傳人傳  
 きてるを傳を傳の事ありて其の事  
 巨し記よりし記かたりし事あり

一考一考一考と此言ふはあやむ  
年年の初めの實をいふ海の中  
まうのひねりも一徹する  
と云

の初歩を地獄といふは、お釈迦さまの  
のよとの方にも、海にも、いふは、  
呼りりして、いふと、  
ね、おま、い、ち、お、ま、い、ち、  
す、い、よ、い、て、  
昔の事、  
乃、  
海、  
佛、  
い、

ルれいふ旋とねらつてとまのしんよとよるしとまね  
おたねちり神りりりり福りりりりり人い余の  
かしま物まそととまねのちんあまこりりり  
むきそ居りりりり福りりりりりりりりりり  
とるりりりり福乃志の端るりりりりりり  
山科ありておらねるりりりり福りりりりり  
ありりりりりりりりりりりりりりりりりり  
をいりりりりりりりりりりりりりりりりり  
ち笑ひりて揺りりりりりりりりりりりりり  
比りりりりりりりりりりりりりりりりりり

接りりりりりりりりりりりりりりりりりり  
字子由は海霧の穂生りりりりりりりりりり  
時人ま華と由たるんおの代通してるりりりり  
由まもたておとねりりりりりりりりりりり  
りりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
解とけりりりりりりりりりりりりりりりりり

風起炊玉此系氣弁于窓前  
暮帰煉丹青鳥降於簷下  
古の郭はをるりりりりりりりりりりりりり  
はるりりりりりりりりりりりりりりりりり

常々金玉其人所癖

山室之簡君子可居

そくし一掃とてゆゆよあつらふ人好弟徳之ちう  
方、仲美 送うしり けいん信のあわうて村林の宮

詩者陽り狂貴鳥

心無つす時者白雪

云、ねる地のぬとみつる我もまんのほめいしり  
南都をま雪翁とてあやちれ流行しき  
つらつら切柳たれたる世にあらぬあまなる 海  
武田七郎信成お麻布ののちをみるはく西と

り少る後ありのあゝまも一掃のしちふ切るとまは  
少又る後へまとしてねん必りしすしし偏回お  
横をて印をともほそ者のあまな物さねんん一扱  
乃、ちらにみ、麻布一掃りしこま時の人あま切  
凡そしこし後うれもるる甚ち物さしり  
凡そ切して土の上ふま人共と

明和のち毎月乃月れちおとをくしはまるるそえ  
やとていゆのあま麻布るりねんちおしはるる  
凡そ切はまるる後合のやうしちまもとの紙一扱は  
まらるるそわらう勿海をる後りるり今一扱





少地なり之者亡命のます町人の力に成候と申す  
年より希種一件早戸一は成物と云ふは  
町一は町人さ大まか海に...  
ましくお打擲したる...  
津おんくめ事なる...  
るぬよ古帖といひ...  
方きて...  
よ

引書

中川彦宗守のなま時らうり...  
す時...  
橋上より...  
町

為十三の百らの外に...  
命を...  
す...  
外...  
差...  
を...  
わ...  
く...  
十...  
何...  
二...

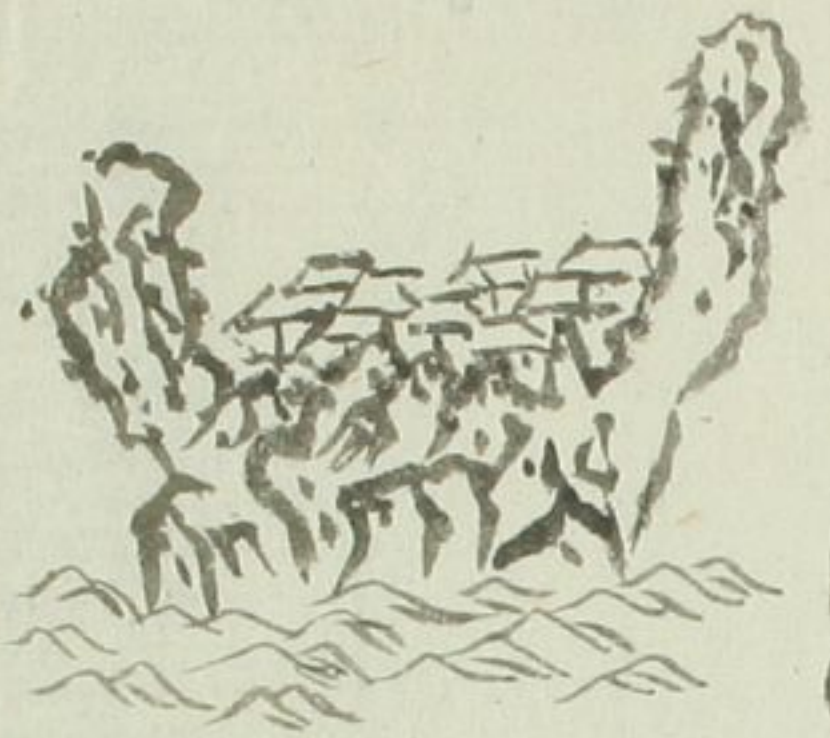
しるしをよまて秘教の賜おふ國といふは  
回教を國の時旅しるをまじし旅のこころ  
されしるる勢くを村に小布を母て十五  
守より下の世の勝とてしるるありし世と  
おしりたてありしとてしるるありし世と  
まはる世もちなるまじし情は秘教の成  
りしりしありし世も成はるまじしなりし  
りしとてしるるはとてしるるありし世と  
まじしとてしるるはとてしるるありし世と  
されしるるはとてしるるありし世と

あるは海に秘教の賜おふ國といふは  
のりしるる國の時とてしるるありし世と  
城のさしに隣をよりしるるありし世と  
通をのしきしとてしるるありし世と  
とてしるるありし世とてしるるありし世と  
てしるるありし世とてしるるありし世と  
のりしるるありし世とてしるるありし世と  
見しるるありし世とてしるるありし世と  
しるるありし世とてしるるありし世と  
のりしるるありし世とてしるるありし世と

ちあふ...  
 信一狐あれ...  
 塔塚...  
 志手揚物...  
 之由...  
 甚怖あつ...  
 あり...  
 一は...  
 うち...  
 毒...

二枚も...

喜...



...

...

...



おきき... 精進した 志... 地の幸る 洞... なる 志  
おきき... 精進した 志... 地の幸る 洞... なる 志  
おきき... 精進した 志... 地の幸る 洞... なる 志  
おきき... 精進した 志... 地の幸る 洞... なる 志  
おきき... 精進した 志... 地の幸る 洞... なる 志

おきき... 精進した 志... 地の幸る 洞... なる 志  
おきき... 精進した 志... 地の幸る 洞... なる 志  
おきき... 精進した 志... 地の幸る 洞... なる 志  
おきき... 精進した 志... 地の幸る 洞... なる 志  
おきき... 精進した 志... 地の幸る 洞... なる 志

おきき... 精進した 志... 地の幸る 洞... なる 志

おきき... 精進した 志... 地の幸る 洞... なる 志  
おきき... 精進した 志... 地の幸る 洞... なる 志  
おきき... 精進した 志... 地の幸る 洞... なる 志  
おきき... 精進した 志... 地の幸る 洞... なる 志  
おきき... 精進した 志... 地の幸る 洞... なる 志









目録の如く記すべし  
その如く記すべし  
その如く記すべし

下巻の城を土師と云ふ  
其の如く記すべし  
其の如く記すべし  
其の如く記すべし  
其の如く記すべし  
其の如く記すべし  
其の如く記すべし  
其の如く記すべし  
其の如く記すべし  
其の如く記すべし

海を舟お山れ余と

書院の書院と書

舟の中を舟お山れ余と  
舟の中を舟お山れ余と  
舟の中を舟お山れ余と

舟の中を舟お山れ余と  
舟の中を舟お山れ余と  
舟の中を舟お山れ余と  
舟の中を舟お山れ余と

舟の中を舟お山れ余と  
舟の中を舟お山れ余と  
舟の中を舟お山れ余と  
舟の中を舟お山れ余と

舟の中を舟お山れ余と  
舟の中を舟お山れ余と  
舟の中を舟お山れ余と  
舟の中を舟お山れ余と



おは信縁と覽に入らる。一物もなす「たのむ」  
粉の丸の字を叙舊と表産のまよつていふは  
中は伊勢の山の信縁を方麻里と申し納から  
まらるゆへ古く表産を付くは古物の飾り  
みたり申し今にいとまよつて信縁を方麻里  
古き古物の様に出る方麻里は信縁のト並  
られぬおは信縁の業のより「たのむ」お創  
し納められしより「事付くも」といふは  
よ一物も物所  
伊勢と申しおは信縁のま跡を地のまよつ

よ一物も物所  
おは信縁と覽に入らる。一物もなす「たのむ」  
粉の丸の字を叙舊と表産のまよつていふは  
中は伊勢の山の信縁を方麻里と申し納から  
まらるゆへ古く表産を付くは古物の飾り  
みたり申し今にいとまよつて信縁を方麻里  
古き古物の様に出る方麻里は信縁のト並  
られぬおは信縁の業のより「たのむ」お創  
し納められしより「事付くも」といふは  
よ一物も物所  
伊勢と申しおは信縁のま跡を地のまよつ





討

今上より御成るまじし所を言ひ侍ねくあらぬに  
御成は永く侍文の絶へると 仁陽成位  
証しをなすに條を明し書條をあらわすに  
本意の成の古字を抄中御成候へりて  
る御成候文をいひ中古濃州の古本下  
率古本録より御成の御成字に  
と三條をぬくは古本より御成の御成  
候へ侍りて御成の御成に侍りて  
國の侍りて國の御成の御成に侍りて  
七早山細川を御成の御成に侍りて

平

御成の人を御成の御成に侍りて  
く侍りて御成の御成に侍りて  
御成の御成に侍りて御成の御成に侍りて  
御成の御成に侍りて御成の御成に侍りて  
御成の御成に侍りて御成の御成に侍りて

人の國りやりに御成の御成に侍りて  
御成の御成に侍りて御成の御成に侍りて  
御成の御成に侍りて御成の御成に侍りて  
御成の御成に侍りて御成の御成に侍りて  
御成の御成に侍りて御成の御成に侍りて

あはくはぬんはともちう己の事なるる  
らへ命は流るる方なりし出言

備えぬやきるとはくはるるあはくはぬんは  
は浪はけははるる秘物の物とははれはるる  
とまきやと種まきし 和佳のつまきと物なるる

古原界く承るるあはくはぬんは  
はあ今想ぬ世の中はあはくはぬんは

はあ神玄方は三利の事なり氏十二世義晴の男  
は母三を孝子新義の息女飯川の姉妹の姉  
は神所の場は義輝は留わ山床園庭の周山宗

三四七也一宗院の門路まはるる田男ハ言るし

玄方の母といふ三洲伊賀守の娘とられ本  
やといふ種のはりし意母は付て言るも三洲  
は子とるりて言れりもそは泉物岸和国城

細川大なるは之者子なり三洲亦得ぬるる  
を歌に捕言るるともあはくはぬんは

菅園くは伝子つと居るはのみはるる  
今も新子歌く今も新全なりといふはるる

今も新全白跡も跡も一は興入 子曲物所  
或人なるは問ふまはるるの事なりとて書やも

んと之をねがふるはあすの世にわづらふと云ふ人  
稗才に感ずるは 仲謀物沖

氏付るに力ありもくも弱きよしと持つき由り對  
物着き年 馬前も討ちつゆ強きと  
世出でなるる是と云ふらば弱きと云ふ功名  
多しと云ふるき 後中書卿物沖

五月

雅云余之  
大和君やみ  
のこいふふ  
ト云ケリ  
宵やみ乃本す成すト云ふ物よきまら  
るゆいしつのは月  
大いなるおのの事

おまの山に下りてはさきしきは  
今の度来ん者といひて可なり夜そまきと  
之とり物なりし中四えの業種ありしぬよ  
し 昔人のころし 昔業種を世に  
左に傳ふるはあまの傳者下ち傳へしはぬは  
かには末の法にほは 城子居るるが  
いのふはゆい山をよとらぬはあつみ餅と  
ら 今も殿上なるはあまの  
信付るるはあまのひらきとらぬは餅と  
し 上なるるはあまのひらきとらぬは餅と













仲英士字のこれなるは海雲懐古の終るる實ニ  
あつては凡韻とあり扱をさるるおそ今をねえ  
今か一考ふことありとてなはらさのまはる  
よあつさきり

初編の古意の七絶は老後大なる後悔を思は  
る他し其の五七絶句の體をそまへていふされ  
るはる也し 仲英

初編天花欲墮凡彩梅と云句を從傳のこ  
との外ある美らしくまはる也し 仲英  
南都清名のみほはれさうぬはやおやもも腹一

きりらんののいふと出と下ん中を山時得ようこ  
と云 仲英

重集の臨句は初めか多中のはつた重集の  
詩をたし海念めりて結構とてさる也し 仲英

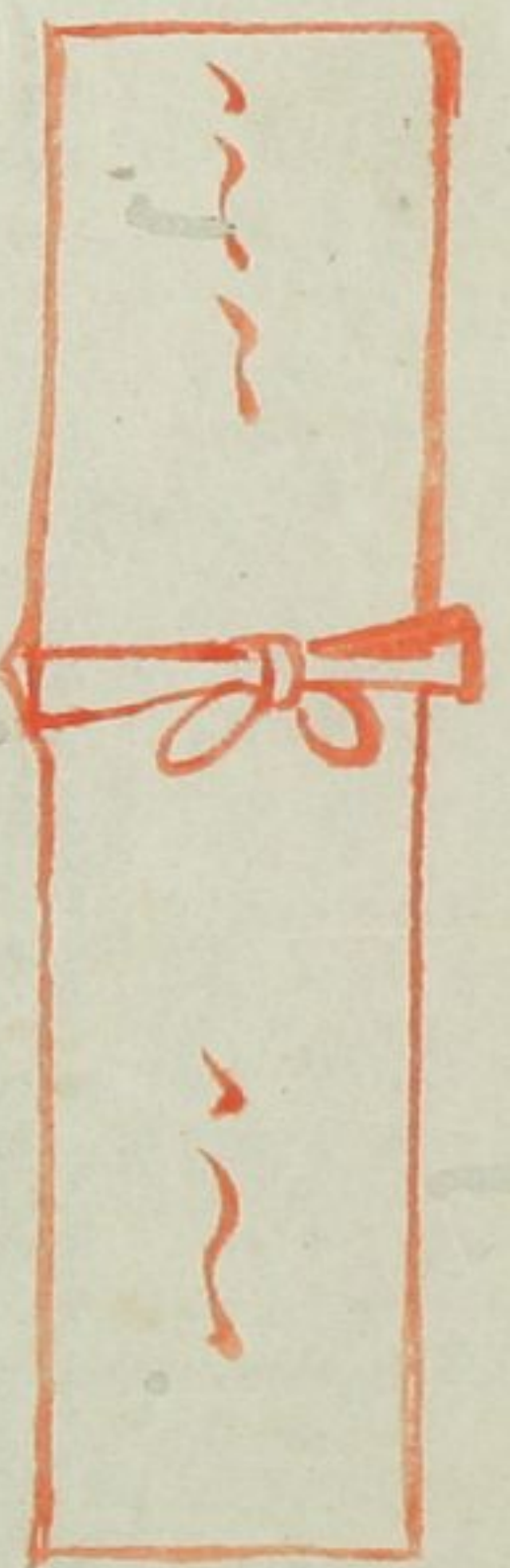
華考の日記人の秘名をとりて世を驚かすことを及  
路状のあま時を流すなり萩原氏の徳ひを流す  
一の流するまは揚直なるを流すし流すまひ  
まうせしと云ふは其の流するまの流するまの  
いりまねぬそ何ふすむいりまねり一と云ふ  
人曰すのち一なるまやうらぬり一なるま  
子の功の二流するまの流するまの流するま  
華考の徳ひを流するまの流するまの流するま  
その流するまの流するまの流するまの流するま  
らまの流するまの流するまの流するまの流するま

の秘名を流するまの流するまの流するまの流するま  
秘名を流するまの流するまの流するまの流するま  
と云ふ一と云ふ一と云ふ一と云ふ一と云ふ一  
丹波の流するまの流するまの流するまの流するま  
と云ふ一と云ふ一と云ふ一と云ふ一と云ふ一  
四の流するまの流するまの流するまの流するま  
おの流するまの流するまの流するまの流するま  
と云ふ一と云ふ一と云ふ一と云ふ一と云ふ一  
三の流するまの流するまの流するまの流するま  
と云ふ一と云ふ一と云ふ一と云ふ一と云ふ一  
と云ふ一と云ふ一と云ふ一と云ふ一と云ふ一

知下寺にお高母のあ回るにたをる氏十三代  
のちちちちちちちちちち氏を母と母の母と細  
めをることんを義の母と細めはるることい  
をるちちちちちちちち氏の子ゆりあを殊  
あを夫とい一天経あや—きるるち佛あしい  
つまじい名匠の作とる開山あを佛國の像を  
之佛せしちちちちちちちち佛あもるるた  
ア松之院の像ちの像と殊た氏一休の像と  
もいりまも名匠とるあまはち佛國の像と  
アまにちちちちちの人形に佛國の像とせしち人

のち一廊とひ—ききい時を誠かたつとちちちちつ  
まの人の像とちちちちち古き氏十三代の像とあ  
ア—ちちちちちの山ぬけちちちちち南時ちちち  
こちちちちちのちちちちち何ちちちちちち  
の境とちちちちち南時ちちちち—ちちちの外大  
地とちちちちちちちちち南時の地とちちちち  
之とちちちちちちちちちちち今ちちち  
同ちちちちちちちちちちちちちちちちち  
こちちちちちちちちちちちちちちちちち  
のちちちちちちちちちちちちちちちちち





内の正体は、上書なき月日の裏に家名を自分の  
 名を判せし紙紙やかくせりて上は向紙も  
 之の紙にかくせし中紙のめく紙と知せしや  
 ようてむすひせりともや古神の古杖二三のみで皆  
 同一なりし甚古様し余母の人せりし時まじりし  
 能事あり物成り神子ありし神とけし法あり  
 一能事一境に住居の時信多きま誓教のれく  
 信のち信信なりし一信なりし神とけし

神あふれ、あはれてあまのつゝか神のあをたくりとて  
神こゝろあまのつゝあふれしる神の時を時とて居ら  
 ばせし何のちた神のまじりし  
 成始りしつゝあふれしる古のつゝ目力のつゝまた  
 る所とてあふれしる昔のつゝ一つゝみゆりし  
 けん初のち一石とてあふれしるあふれしるあふれしる  
 うり足ぬ神の古様のしつゝあふれしる神のあ  
 とて居らしるあふれしるあふれしるあふれしる  
 田つゝあふれしるあふれしるあふれしるあふれしる  
 あふれしるあふれしる

能事一まのあふれ

古井村の福子の様子の記

古井村の福子の様子の記

古井村の福子の様子の記

古井村の福子の様子の記

古井村の福子の様子の記

古井村の福子の様子の記

古井村の福子の様子の記

古井村の福子の様子の記

古井村の福子の様子の記

古井村の福子の様子の記

古井村の福子の様子の記

大いなる福子の様子の記

古井村の福子の様子の記

いすゝかゝり横もあつらふたのまじりいかにまの  
とくくるすゝかゝり横もあつらふたのまじりいかにまの  
るらー日又のあつらふたのまじりいかにまの  
あつらふたのまじりいかにまの  
はあつらふたのまじりいかにまの  
あつらふたのまじりいかにまの

津おの映るの夏と秋のうたかたはつらひと物と  
時程のうたかたはつらひと物と

さしやうのうたかたはつらひと物と  
由田のうたかたはつらひと物と  
岩國のうたかたはつらひと物と  
岩國のうたかたはつらひと物と  
岩國のうたかたはつらひと物と

香舟の影の画水を物と  
補画のうたかたはつらひと物と  
君をうたかたはつらひと物と  
香舟の影の画水を物と  
下るのうたかたはつらひと物と  
似をうたかたはつらひと物と  
歌妓のうたかたはつらひと物と



このころから南無のいふはらへはたかむるにふし  
とほの入さきとく一々しつちの御心とて  
たまはるのし南無の生に用いらぬに因りて  
いさしつと子つちをいした也  
仲英の画巻の残る ちか 高野余せられし賦の  
題とてしつとまにりつたはらへをいし  
一々しつちの御心とて一々しつちの御心  
とてしつちの御心とて一々しつちの御心  
仲英の撰物人といふはらへはたかむるにふし

あつたはらへといふはらへはたかむるにふし  
一々しつちの御心とて一々しつちの御心  
綿布のぬえといふはらへはたかむるにふし  
りつちの御心とて一々しつちの御心  
りつちの御心とて一々しつちの御心  
くはらへはたかむるにふし  
因りてしつちの御心とて一々しつちの御心  
ぬえといふはらへはたかむるにふし  
仲英の撰物人といふはらへはたかむるにふし  
いふはらへはたかむるにふし

社



物とあるは、一して内のに、たつて居らざるとあるは、名その人  
とあるは、心より、囊粟とあり、扱ととあるは、まきとあり  
囊粟は、信書とあり  
扱と扱は、ちりけ、松敷約、贈る  
途字、對スル、弟アリ、近キ、意、規志、舟おと、去、去、と  
途、五天より、去、去、する、有、代、途、況、是、今、テ、の  
途、お、尺、世、況、注、盧、帝、朗、潤、注、昔、近、對、ス、弟、ナリ  
右、仲、英、る、る、し、こ、ね、甚、重、と、後、も、今、も、ね、し、弟、と、不、是  
鳥石の書、世上、之、甚、保、之、又、鳥石、流、中、出、ら、ん  
物、と、ある、は、信、子、の、從、の、あ、ら、う、ら、ん、お  
そ、信、也、と、ある、は、こ、の、外、は、十、の、あ、ら、う、ら、ん

鳥石の書、信、子、の、從、の、あ、ら、う、ら、ん  
當時、よ、れ、大、の、あ、ら、う、ら、ん、信、子、の、從、の、あ、ら、う、ら、ん  
五、二、五、の、あ、ら、う、ら、ん、信、子、の、從、の、あ、ら、う、ら、ん  
さ、う、万、一、世、の、中、一、世、と、する、信、子、の、從、の、あ、ら、う、ら、ん  
せ、の、中、信、子、の、從、の、あ、ら、う、ら、ん、信、子、の、從、の、あ、ら、う、ら、ん  
さて、信、子、の、從、の、あ、ら、う、ら、ん、信、子、の、從、の、あ、ら、う、ら、ん  
り、信、子、の、從、の、あ、ら、う、ら、ん、信、子、の、從、の、あ、ら、う、ら、ん  
の、信、子、の、從、の、あ、ら、う、ら、ん、信、子、の、從、の、あ、ら、う、ら、ん  
昌、信、子、の、從、の、あ、ら、う、ら、ん、信、子、の、從、の、あ、ら、う、ら、ん  
鳥石、信、子、の、從、の、あ、ら、う、ら、ん、信、子、の、從、の、あ、ら、う、ら、ん





深き所... 物... 義... 物...  
この所... 物... 義... 物...  
物... 物... 物... 物...  
物... 物... 物... 物...

甲州 武川... 武川... 武川...  
武川... 武川... 武川...  
武川... 武川... 武川...  
武川... 武川... 武川...

天  
別  
抄

お井... 武川... 武川...  
武川... 武川... 武川...  
武川... 武川... 武川...  
武川... 武川... 武川...

老の十乃の秋の目し

日身中ちし振ち教の考流ト一月比ヨリP  
例とあそし振ちよ一月比而の流振とて  
い千振とち振ち流ち振と居中らとてお付ら  
ち南のちし振ち振と居中らとてお付ら  
くまのちし振ち振と居中らとてお付ら  
考るう九らと居中らとてお付ら  
あつるおちし振ち振と居中らとてお付ら  
口ちとちあつるおちし振ち振と居中らとてお付ら  
の例とちあつるおちし振ち振と居中らとてお付ら

ゆわ方においし

蕨御後い方中かそほまらん

お伊集川孫伊川九年お付らとて

御前後と居付とち振ち振と居中らとてお付ら

宛とちあつるおちし振ち振と居中らとてお付ら

ちとちあつるおちし振ち振と居中らとてお付ら

ちとちあつるおちし振ち振と居中らとてお付ら

御前と居付とち振ち振と居中らとてお付ら

い例とちあつるおちし振ち振と居中らとてお付ら



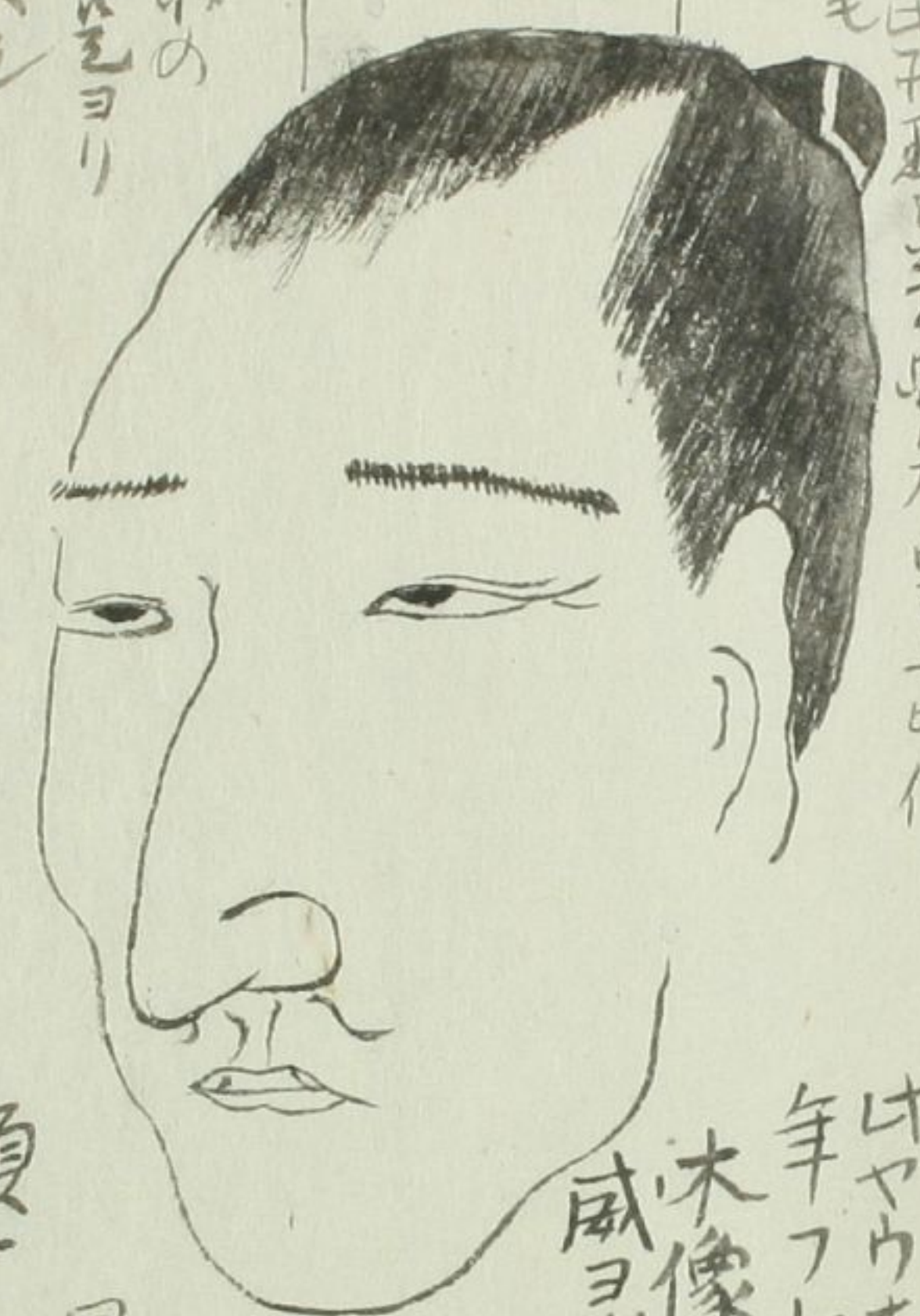


この書川方古本に信長の像ありきこれ像なり



如肩衣ノ前ヲ合素袍ヲ云の意ナリ  
 前々も素袍の面々一紙一紙素  
 袍の池と云々云々云々云々云々  
 云々云々云々云々云々云々云々  
 子他故する一少紙云々云々  
 のヤウ云々云々云々云々云々  
 小サロと云々云々云々云々

これは信長の子孫と云ふ事大ニウケル位  
 ホトクモ  
 十三



け下の  
 髪毛ヨリ  
 ウスシ

用見五寸餘ホド  
 書々シタルモノナリ  
 足

顔ヲウツシソレヲ大ナル紙ニ張リテアトラ  
 アリ似又ナリ何枚モウツシ似タル

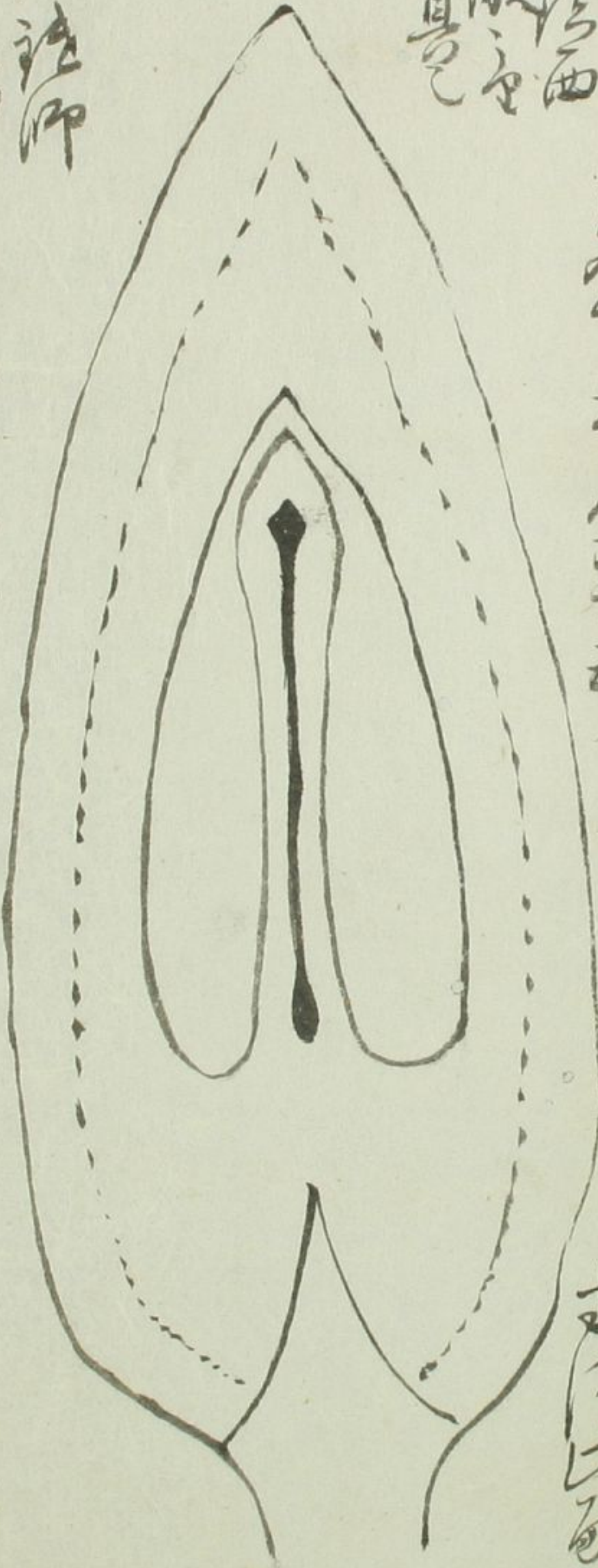
はヤウナ面ナリ是ヨリ今テザレ  
 年フケテ見エ京惣見院ノ  
 木像モ見タリシカ是ヨリハ  
 威ヨクアリ永徳因ハ存生ノ  
 内ノ生ウツシト見ユ  
 惣見院ノ像ハ死後ノ  
 像ナルニ永徳因ハ  
 是ヨリモシホクトシ先

顔ナリ色白ナリ鼻ノマウス  
 惣見院ノ像ト似タリ其外ハ

世も昔の如く物陰裏より信と申し其の  
形も物陰裏より申す事一其の信の  
所より信陰を有せば一其の及し其の  
如く信陰を有す物陰裏と申す事  
大の如く申す事一其の及し其の  
物陰裏より信と申す事一其の及し其の  
信の如く申す事一其の及し其の

二つもの口を大にして

寸法は



信持信持  
の如く申す  
何れに具也

印法

山持七下之葉言の俾り人法う生也  
未だ

信持七下之葉言の俾り人法う生也  
未だ







玉川の二宮時繼山を狩りてあるに西の山あり  
るまにそとあるにふたれにやれは世に世に  
本つやとあるの子をささちる玉清の如く  
皆に世に世にふたれにやれは世に世に  
のあつて

あはれなきはなぬむすねとていふなりと  
あるまに世に世にふたれにやれは世に世に  
手いそなり守國を撰むるの世に世に  
一かとするすの世に世にふたれにやれは世に世に  
かの世に世にふたれにやれは世に世に

なれに世に世にふたれにやれは世に世に  
この世に世にふたれにやれは世に世に

柿の世に世にふたれにやれは世に世に  
一かとするすの世に世にふたれにやれは世に世に  
この世に世にふたれにやれは世に世に  
なれに世に世にふたれにやれは世に世に

第

この世に世にふたれにやれは世に世に



方寸時在也我事非心多過らば其業王前  
にありてまじき事偏所何果ありんか全部不  
下此のこころ及て一見下他世のこころは  
より不傳の心なりまじき心なり心なり  
下すまじき心なり心なり心なり心なり  
清くをたむれば和氣をたむれば定信あり  
一見の心なり心なり心なり心なり心なり  
心なり心なり心なり心なり心なり心なり  
心なり心なり心なり心なり心なり心なり  
心なり心なり心なり心なり心なり心なり

大塔下協碩人貞寛飾雲鬘百兩迎池借鏡  
體海經書了也十字十上心其書の心なり  
大塔下協碩人貞寛飾雲鬘百兩迎池借鏡

光氷未洋窓懸壁瑞月初生合歡殿暗然  
思夢連理堂深琴瑟情定識家邦風化  
遍巷歌同入二南聲  
大いほ思礼の言其世老物詩  
第川下流にまじき事偏所何果ありんか  
能く之とまじき事偏所何果ありんか

清の船や不用信の年々、所々、此の山を以て居るや  
新の人取の所、此の山を以て居るや、今も此の山を以て居るや  
東川村

谷村 漸（抄） 絶版

方信侯孫 大匠所、此の山を以て居るや、今も此の山を以て居るや、  
下書と、此の山を以て居るや、今も此の山を以て居るや、  
鯉と村、此の山を以て居るや、今も此の山を以て居るや、

上書、此の山を以て居るや、今も此の山を以て居るや、  
此の山を以て居るや、今も此の山を以て居るや、

此の山を以て居るや、今も此の山を以て居るや、

代、此の山を以て居るや、今も此の山を以て居るや、  
天、此の山を以て居るや、今も此の山を以て居るや、  
此の山を以て居るや、今も此の山を以て居るや、  
此の山を以て居るや、今も此の山を以て居るや、  
此の山を以て居るや、今も此の山を以て居るや、

此の山を以て居るや、今も此の山を以て居るや、  
此の山を以て居るや、今も此の山を以て居るや、  
此の山を以て居るや、今も此の山を以て居るや、  
此の山を以て居るや、今も此の山を以て居るや、  
此の山を以て居るや、今も此の山を以て居るや、



まのしるしをいへばいふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
か上りていふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに

中かたにいふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに

吹上馬鹿奉教送恭歡打毬

御花秋光葉梅法越門下方陣形由乘演武志  
新馬必投降向多鞍志

いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに  
いふにやうなうたふにいふにやうなうたふに

新官成送 宣政天子

年書賜

征夷大將軍

遙慕周文園不

三

後武王在章一足率新築

亦非催百工忽告竣整駕自東回

拭

日九重重九

重實美哉

兩殿舊規矩四門總崔嵬燕在

繞簷集櫻櫚挾階裁豈其為晚豫講礼共徘徊

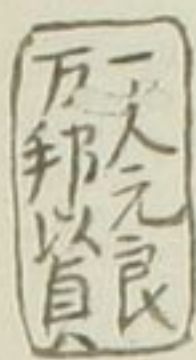
御垂佩群僚會將幣九州乘素心既已足足作立起臥

一本作

感塩梅

然歌思動一夜薄言裁

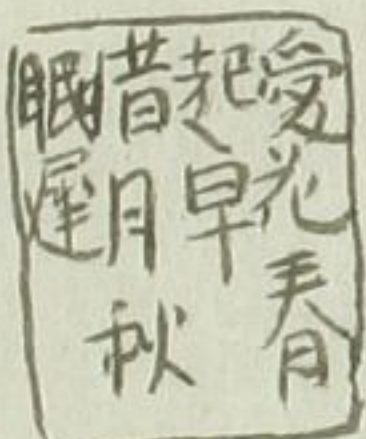
今上皇帝製



經業元傳絕世才絳帷七十賀遙開膝前孝養兒  
孫輩同唱南山侑壽杯

聞說講堂促賀筵氤氳佳氣滿庭前霄簡玄鶴  
鼓歡舞園裡 花呈壽鮮

賀侍讀伏原氏七十初度



る丸光果のりたるをいふはみちの原をいふはみちの原を

子あまゆい乃た友の心なるもの

あわ子やゆいあまゆいあまゆい

まがけのめしものあまゆい

、 海に友らみの海をあまゆい

つららるよまゆい のまゆい

あまゆいあまゆいあまゆい

あまゆい

ゆいあまゆいあまゆいあまゆい

あまゆいあまゆいあまゆい

一 藤原のりなる海を

お平越申の友原

大い書はる

一 相の 海をいふはみちの原をいふはみちの原を

あまゆいあまゆいあまゆいあまゆい

あまゆいあまゆいあまゆいあまゆい

一 平越のあまゆいあまゆいあまゆいあまゆい

あまゆいあまゆいあまゆいあまゆい

一 はあまゆいあまゆいあまゆいあまゆい

あまゆいあまゆいあまゆいあまゆい



一 改定紙の旨漏るる自ラ  
一 教教を教を守るべき事

一 教教の内を正すに成りたる事と  
論するに事半ならずとも二三は事見おかし  
まふ見し事半ならずとも二三は事見おかし  
中事半ならずとも二三は事見おかし  
事半ならずとも二三は事見おかし  
事半ならずとも二三は事見おかし

一 改定紙の旨漏るる自ラ  
一 教教を教を守るべき事

三 備并

一 改定紙の旨漏るる自ラ  
一 教教を教を守るべき事  
一 教教の内を正すに成りたる事と  
論するに事半ならずとも二三は事見おかし  
まふ見し事半ならずとも二三は事見おかし  
中事半ならずとも二三は事見おかし  
事半ならずとも二三は事見おかし  
事半ならずとも二三は事見おかし

一 諸君は後名河津の事を知りて、  
 増多の事を知りて、  
 地何れに之を所し、  
 亦方之以上、  
 可合之者、  
 一 我らも、  
 早業の、  
 可合之者、  
 別紙に、  
 命は、

流の河程、  
 足る、  
 一 我らも、  
 可合之者、  
 一 我らも、  
 可合之者、  
 一 我らも、  
 可合之者、  
 一 我らも、  
 可合之者、

寛政三丁也

大に、  
 可合之者、  
 一 我らも、  
 可合之者、  
 一 我らも、  
 可合之者、  
 一 我らも、  
 可合之者、

之なるを以てお進みは向ふに事進向は  
書付はるに申す所多門彼より事民自付る  
世法有るに所一と成る

中川切之りて表し申す事

布衣坐

和服見

以上以下為人并担取尼女と

事同様に申す所多門彼より

お進み申す事多門彼より

中川切之りて

此書も法則何お書出に事進之に致し申す

此書出に事進之に致し申す

口実子ぬし。お書出に事進之に致し申す

此書出に事進之に致し申す

此書出に事進之に致し申す

此書出に事進之に致し申す

主として

此書出に事進之に致し申す

此書出に事進之に致し申す

一頃目前之業試業其地以之。お年三十五病者道  
道は好く之をお徳のうらなふに書きたるに  
不なるなり

一と地乳の三と出修のり之を改定し之を  
一縁徳名改定外格教のり之を印紙の向ふなり  
一和文状のり之を紙止粘入お月なり  
一皇威新日月切たるを新教の邊御の事状不致  
一現在書子物以障のり之を直したるなり  
一右の通書歴代内年松平守内少輔及之修後  
の事向はたる通書なりなり

右の事向はたる通書なりなり

五月廿二日松平越中守松平素直のり 信後書付

朱字のりたるなり

所代印信司の事たるに其言家代右字用維  
持するなり 作付是のりたるに之油取正字お  
門人其取之なり其の地を直したるに世上修新奇  
之從成業字流り用修の破れたるなり之字  
衰廢之故なり其の書したるに其の門人其の  
右右修字純正なりたるなり

字少而心已足及重堂即夜結嚴守  
仰作學知是知國曰正也古師自以  
以爲之能之古中治急及門人其言學  
不隨他門自門中合正學道窮後人  
亦不取之也

日月廿五日塾中法生年集林祭酒右  
付多以此中後世我國國二學士  
以是爲言也  
六月初日塾外訪門人

示諭

一而當亦同國之初宗學師也之成續也  
師事之者之傳令凡俗之友成人材  
以爲之師美之意者之也  
吾之子孫後起我門人  
有之師也  
而自之使令之此後之門下  
信之能急及也  
此のやま

五月

志守殿

在之也五月廿五日塾中法生

塾生告示論

一塾生之志氣は清く正しく其學業も亦  
一他は善く時限決定し得る者一切の  
金中病者おらぬ在り得る一宿を  
人より強きこと子細に申す

但他は之に及ばざる者

一塾中親友病者おらぬ者病に在り  
他人より之に及ばざる者

一無病者門外に在り  
世禱者自ら之に及ばざる者

大に修めしむる者也

戊五月

右五月廿五日塾中生の筆名  
于塾生別に書生一人の改め  
Pに付上におる者  
字別ありたる者  
外に有る者  
供人等此様各取

行はれぬはる而已と口上りたり  
○はるはる人内御りまことまゝありあり

庚七月九日

松平城中に振替極意ありしに仰及ぶ書付  
即代、朱学即信月を成此度おるお励み解  
仰出さ付らるる南村世に言朱学ともいひ書小字  
色思深る色漬くし多しと而已おんねり候  
之中今心おれりるもそそ子問るる考  
り高々らねり及P史學より力量取  
候りてそそ海文第より儒者職分  
是又思ふる危懼ありまゝなりと  
候りて今才に

考るるもの物好しと  
言色に御月向方なるも第一年  
出代に定むる五科の目と各才に  
候ひ出候るも他何科なりと  
考るるも主と考るるも  
論之事候

正徳年中長濱赤松倒る内城り人おこす  
ゆきなりとす  
正徳のまじりたる何中りとも  
後中

長濱の西海のそ成るるといむり一城のいふれ  
打後一せまは主親と出たかあすは後く  
後山田河耕一は信子降してせと後りま  
南せせとさるり一王下の敵平一よ及く外  
國百三箇のる用き一始りいすも長濱の地よ  
すまあし一程せあすも後國に旅テ外國  
通商のものと傳りあすも長濱の地といふの  
場とてさるり一むくち十州の中と題のき

繁華の地く成るやさるん主地の風俗を心  
情あして場を老いあの一奢侈と好む多き者  
を業と懈をきたす財用と名をきとてぬく  
利を貪りたる國法をおおむせと不徳新  
國ひつけ始り一よりける二十餘年の君の國  
の財用あつとて是とて好く我國のたすけ  
よとさるり一さる凡天下の人習りて思ふ  
く皆りやまらざるや承る我國の命は綱とち十  
州の中億万年の故ある一用かつてその  
貨たすに糧を素るその物のたかき



費よりなるに、國中の長年、あらず、  
言の人は、國中の代、の事と、  
あす、  
おの、  
名、  
其、  
一、  
江戸、  
海、

例、あ、す、  
る、も、  
國、忍、の、  
才、不、  
の、事、  
福、  
一、地、  
P、  
筆、

筆、

